

研究実践報告

「保育内容の指導法（環境）」の実践と課題

杉 山 浩 之*

Practices and Tasks of the “Teaching Methods of the Early Childhood Care and Education Approaches for Environments”

Hiroyuki SUGIYAMA*

はじめに

本稿においては、2021年度の「保育内容の指導法（環境）」（2年次後期開講）を振り返り、成果と課題を明らかにし、2022年度以降の実践の改善を図りたいと考えている。

「保育内容の指導法（環境）」は、演習1単位、2年生の後期科目で、7.5コマで、50～100名の範囲であり、2クラス（31人ずつ）で授業を運営している。履修者は、幼児教育コース生と児童教育コースの幼免履修者である。

授業日程は資料1に示した通りである。

I 授業「保育内容の指導法（環境）」の実践内容

(1) 本授業の達成目標（本学のシラバスより引用）

1 幼稚園教育要領に示された幼稚園教育の基本を踏まえ、領域「環境」のねらい及び内容を理解する。

(1) 幼稚園教育要領における幼稚園教育の基本、領域「環境」のねらい及び内容並びに全体構造を理解している。

(2) 領域「環境」のねらい及び内容を踏まえ、幼児が経験し身に付けていく内容と指導上の留意点を理解している。

資料1 保育内容の指導法（環境） 授業日程（2021年度）

A / B クラス各 31名	1	オリエンテーション（シラバス・授業日程説明）	Teams 実施	第2～8回は 対面実施
	2	生き物研究レポート作成（グループ編成説明）	教室A（一斉）	3つの課題説明と作成の時間となる
	3	指導案作成（指導案の説明、各自で作成）	教室A（同上）	
	4	教材作成・模擬モギ（虫の生態を説明する教材の説明、教材作成）	教室A+教室C	
	5	模擬保育1+全体振り返り（45分ずつで配分）	教室C+教室A	C：4教室
	6	模擬保育2+全体振り返り（同上）	教室C+教室A	C：4教室
	7	模擬保育3+全体振り返り（同上）	教室C+教室A	C：4教室
	8	模擬保育4+全体振り返り（同上）	教室C+教室A	C：4教室

* 本学教授

(3) 幼稚園教育における評価の考え方を理解している。

(4) 領域「環境」で幼児が経験し身に付けていく内容の関連性や小学校の教科等とのつながりを理解している。

2 幼児の発達や学びの過程を理解し、具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける。

(1) 幼児の認識や思考、動き等を視野に入れた保育の構想の重要性を理解している。

(2) 領域「環境」の特性や幼児の体験との関連を考慮した情報機器及び教材の活用法を理解し、保育の構想に活用することができる。

(3) 指導案の構成を理解し、具体的な保育を想定した指導案を作成することができる。

(4) 模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている。

(5) 領域「環境」の特性に応じた保育実践の動向を知り、保育構想の向上に取り組むことができる。

上記の内容から、特に指導を強化した内容は、1-(2)、2-(2)、(3)、(4)である。7.5回の授業内容で上記の9項目のすべてを学修することは時間不足が否めない。1-(1)は、1年前期「子どもと保育内容（環境）」で中心をおいて指導しているので、本授業では扱っていない。1-(3)(4)については、全体の振り返りで体系的ではないが指導した。2-(1)(5)についても同様に全体の振り返りで体系的でないが指導した。

(2) 授業内容

学生の課題は、①虫の生態レポート、②保育指導案の作成、③教材の作成、④模擬保育記録（録音の文字起こし）の作成、⑤模擬保育の振り返りシート作成、⑥授業後アンケートである。

① 虫の生態レポートの内容

1) 生き物が適した生活環境と四季に応じた生活、

2) 誕生から死までの成長過程

3) 交尾・出産・育児と雌雄の役割、

4) 食べ物

5) 天敵

6) の生き物との共生関係

以上を、A4、1～2枚（図写真コピーも含むが、2割程度とする）とした。

21年度は、園庭や園外で幼児が身近に見つかる虫を指定した。20年度は、動物であれば自由としたが、幼児に馴染みでない動物を取り上げた例もあったので、園庭にいそうな身近な虫に限定して、8種類を指定した。すなわち、前半の草食系の虫（バッタ、チョウ、セミ、ダンゴムシ）と後半の肉食系の虫（カマキリ、アリ、クモ、トンボ）で4種類ずつとした。8人グループであり、学生が1種類ずつ選択し、どのグループもこの順番で模擬保育を進めていった。一斉の振り返りも同じ虫の教材作品を比較し、良かった点や改善点を共有化しやすい授業となった。

ところで、ここでは昆虫という言い方ではなく、「虫」とした。それは幼児にとっては「虫」としたほうが分かりやすいからである。言うまでもなく、ダンゴ虫と蜘蛛は、どちらも節足動物であり、昆虫ではないが、虫偏で漢字が成り立っている。学生には、この点の区別を説明している。

② 指導案作成 対象年齢 5～6歳（年長児）

幼児の実態 これまでに身近な生き物に興味を持って関わったり、ウサギやニワト

り、チョウチョ、ザリガニ、アリ、ミミズなど小動物を飼育したりしてきた。飼育することを通じて、生物が人間と同じように、食べものを必要としたり、親が子どもを育てたり、外敵がいたりして身の守り方を工夫するなど、動物の生き方について興味を持ち、絵本や図鑑を見て学んできている。

ねらい 動物は、それぞれ不思議な生態を持ち、植物を含めて他の生き物と共生しながら生きていることを想像を通して深く理解する。

導入（動物の作品を使い、子どもが動物の生態について知っている事を出し合い、興味を高める）

展開（まだ子どもたちが知らない生態に関わる発問をして、身体表現も入れて、想像して考えあったり、子どもの疑問に答えたりして、感動や好奇心を高めていきながら、探究していく）

結末（分かってきたことや分からなかったことを確認し、次の課題（動物園で観察とか動物の先生に来てもらうとか）を子どもの考えを尊重して、次にどうするかを決めて終わる）

以上の①～③を縦列（5分・12分・3分）にする。横列は、A保育者の言葉（意図・留意点を入れる）。B子どもの発言・身振り。A4縦ヨコ書きとする。*保育者の1人芝居にならないよう子ども役7人が積極的に参加する。造形作品を使い動物の生活を子どもと応答的に説明し、その後、生き物の生活を想像して表現活動をする。計20分（絵本の絵を参考にするのは良いが、読み聞かせはNG。今回は、子どもの造形活動もNG）

指導案は、グレкса提出として、学生は相互

の指導案は見えていない。模擬保育は、指定時間20分とした。導入5分、展開12分、まとめ3分の割り振りを目安として指定した。

③ 教材作成 造形作品（生き物の顔か身体、模擬保育で保育者が使用する）画用紙・布など、ペーパーサート可とした。虫の教材は、20年度の事例モデルを示して分かりやすくした。20年度は後半で前半の事例モデルを示した。さらに、模擬保育を進める中で、学生は他の学生の教材を参考にしたり、毎回の授業後半で模擬保育を行った学生が全体の前で教材作品を見せての振り返り（良かった点と改善点）で紹介されたりするので、学生は相互に学びあうことが出来た。自己評価も行われることになる。

④ 模擬保育記録 模擬保育は録音をして、学生が文字起こしをしてグレкса提出としている。20分ということであるが、15分以下の場合は、不足している時間分を想定させ、赤字で追加の加筆をしている。

⑤ 授業後のアンケート結果（21年度実施。回答者、前半クラス31人中、30人が回答。）

- 1 「虫の生態」に関する好奇心
「少し高まった」（17人、56.7%）が「かなり高まった」（13人、43.3%）を上回った。
- 2 「虫の生態」についての知識
「かなり増えた」（21人、70%）が最も多かった。「少し増えた」（8人、26.7%）であった。
- 3 保育者として前に立つ抵抗感
「少し減った」（21人、70%）が最も多いが、「かなり減った」（6人、20%）を加えて27人、90%であった。

4 「教材作成の仕方」の理解

「少し分かった」(16人、53.3%)が「かなり分かった」(14人、46.7%)を少し上回った。

5 「虫の生態の伝え方」の理解

「少し分かった」(18人、60%)が「かなり分かった」(10人、33.3%)を上回った。

6 授業以外での模擬モグの実施

「子ども役を入れて行った」(13人、43.3%)が「子ども役なしで行った」(10人、33.3%)を上回り、行わなかった(7人、23.3%)は最も少なかった。

7 授業以外での教材作成の時間

「3時間」が最大値(6人、20%)となったが、「3～5時間」(13人、43.3%)であった。「6時間以上」(13人、43.3%)も大勢いた。

8 本授業の良い点

<模擬保育に関して>

- 1) 模擬保育を子どもと体験できる。
- 2) 少人数での模擬保育で顔見知りもいて緊張しすぎず挑むことが出来た。
- 3) 少人数グループの保育で応答的な保育がやり易いと思った。
- 4) 教員からの的確な詩的や助言や感想を一人ひとり貰えたこと。
- 5) 子ども役を楽しめたこと。
- 6) 保育者役を学べたこと。
- 7) 保育者目線と子ども目線の両方から学べた。
- 8) 子ども役からも意見がもらえたこと。
- 9) 保育の流れを理解できた。
- 10) 保育者として前に立つ自覚と保育の際の声掛けの仕方を学べた。
- 11) 自分の模擬保育と他者の模擬保育からお互いの良さや改善点を学べた。

12) 児童教育コースの学生であり、幼児教育コースの模擬保育を見るのが少ないので学びとなった。

13) 児童教育コースの生活科に近い学習と保育の違いを学べた。

14) 模擬保育への意欲が向上した。

15) 個人の活動に多くの時間を使えたこと。

16) 虫の生態レポートを書いてから指導案を作るため、自分でも知らなかったことをしっかりと学んでから模擬保育を行うことが出来たこと。

17) 1人でやらなければならないから、責任感と達成感を感じる事が出来た。

18) ゼロからのスタートで確実に力が付く。

<教材である虫の生態の学びに関して>

- 1) 自由に生き物を選ぶのではなく、虫の指定があったので、自分から虫は選ばないだろうから虫のことを学べた。
- 2) 選んだ虫以外の生態も学べた。
- 3) 虫という触れやすい教材の利用を学べた。
- 4) 教材の作成時間の目安や作成方法が学べた。
- 5) 虫の調べ方やまとめ方を学べた。
- 6) 虫についてどう保育するのか、情報の集め方と保育の流れや伝え方を学べた。
- 7) 造形作品を皆の前で発表し、模擬保育の良かった点と課題を発表しあうことで学びの幅が広がった。いろんな人の工夫点が知れて良かった。
- 8) 虫の対する親近感が湧き、興味を持つことが出来た。

9 本授業の改善点

<模擬保育の子ども役>

- 1) 友だちとの仲が深まっていない中で子ども役の発言が少なかったこと。

2) 子ども役が変わらないので、緊張感がないこと。

3) 子ども役を増やしても良いのかと思った。

<模擬保育の参考資料>

4) 前の人（模擬保育を終えた人や過去の事例）の資料をもっとたくさん見たかった。

5) 指導案の作成のために模擬保育の模範を見たかった。

6) 初回の模擬保育者が参考に出来る例がないこと。準備の時間も少ない。

7) 指導案の参考例を見たかった。

8) 他のグループの模擬保育を見たかった。

<授業全体について>

9) 説明内容に繰り返しがあり、長く感じた。

10) 説明内容にもっと具体的な例が欲しかった。

11) 教材作成の準備の時間が足りなかったこと。授業時間内にも取ってほしかった。

12) 全体的に時間が少ないこと。

(7.5コマで教材研究から模擬保育まで行う事であろう。杉山)

13) 指導案作成から模擬保育までにグループ活動があると良い。

14) 児童教育コースの学生は保育の理解が弱いので、児童教育コース向けの指導助言が欲しい。設定保育や保育の在り方の説明をしてほしかった。

15) 虫が苦手なので、動物も入れてほしかった。

10 本授業の満足度 「非常に満足した」(14人、46.7%)と「まあまあ満足した」(16人、53.3%)が拮抗した。

II 成果と課題～受講者アンケート結果を中心に～

20年度は授業者アンケートは実施しなかった。21年度の学生への授業後アンケート結果から、以下の点が整理できる。

① 全員が模擬保育（20分以内）の指導案を作成し、それを実践し、振返りを個人でグループと全体で行い、学生相互の学び合いが出来たことで、30名の回答者全員が「非常に、まあまあ満足した」と回答していたことに繋がったこと。

② 学生たちの「虫」の生態に関する知識が増え（29人）、さらに、学生たちの「虫」に対する好奇心が高まったこと（回答者全員30人）。好奇心の高まりについては改善の余地があったこと。生態レポートの全体での振返りが必要であろう。

③ 教材作成の仕方と同様であるが、「少し分かった」が上回ったことから改善の余地がある。模範的な模擬保育の事例の中での具体的な説明を加えることが必要であると考える。

④ 虫の生態の伝え方についても「少し分かった」が上回っている。③と同様に具体的な保育の中での事例紹介をする必要がある。

⑤ 模擬モギの実施に関しては約4人に1人が行っていなかったが、昨年度は、1回目に模擬モギを行い、2回目に教材を補強して模擬保育をした。これはこれで2回目やりにくくなるということが起こった。グループ内での自由な模擬モギの時間を保障することも必要かもしれない。自主的な模擬モギを事前学修として行う形のままだ良いのかもしれない。

- ⑥ 保育記録の作成は、保育者と子どもの発言の逐語録となる。模擬保育であるのでやむを得ないが、本物の自然の中での模擬保育であるならば、保育ドキュメンテーション作成も視野に入ってくる。ICT活用の保育の在り方を考えていく1つの視点を本科目も内包している。

おわりに

「保育内容の指導法（環境）」の授業実施の2年が終わった。

模擬保育を全員が行う場合、全ての学生が行う模擬保育の時間を見ることはひとり担任では不可能であり、全員が指導計画案を作成し、代表が模擬保育を行う形式がある。本授業の場合は、1クラス全体の4グループを巡回して行う場合と、補講を設けて2グループを見る場合とがあった（20年度）。補講を設けるということは、学生は7.5回の授業となるが、教員側は、授業回数は4回ふえることになる。21年度はシラバス通りの方法を行った。当然、後者の方法（1コマに2グループ模擬保育の実施）が時間上、許されるならば授業者にとっても学生にとっても利点が多い。

次年度以降、上記の成果と課題を見つめ直し、より一層改善された授業展開を実施していきたい。

ところで、自然に対する好奇心、特に本授業では、虫の生態の不思議なことを知ることで虫に対する好奇心を育てることをねらいとして、虫の生態を応答的保育を通して幼児に伝える保育を目指した。

小澤紀美子（文献1、p. 23）が言うように「幼児期から草花や小さな生き物に触れるという自然体験は、本来人間が持っている五感を刺激し、好奇心を育み、感動を知り、豊かな感受性

の発達を促す基本的な要素」である。1年次の「子どもと保育内容（環境）」（1単位、講義）に続く、本科目そして「追記資料」にある「保育内容の教材研究と開発（環境）」へと継続する科目の継続性をさらに深めて行きたい。イデイス・コップス（文献5）を参考に、「認識の源泉としての驚嘆」が「エコロジカルな環境の繋がりを言葉の上ではなく、イメージとして身体的に獲得していく」と言う（文献1、p. 23）。ただ言葉を通して伝えることの必要性を想う。体験を意味づけるのは言葉である。言葉と体験の往復が体験の意味を印象付けていくのではないだろうか。命あるものに触れていく体験に誘う言葉、それを補う造形表現の作品で本授業では、環境教育の方法も追究した。今後さらなる実践を積み、考察を重ねていきたい。また「生態系が持続しているのは、太陽から供給されるエネルギーによって物質の循環がなされているからである。」（文献2、p. 164）この視点が、本実践では落ちている。この点は次年度以降の課題として受け止めたい。

参考文献

- 1 小澤紀美子編著、『持続可能な社会を創る環境教育論』、東海大学出版部、2015年。
- 2 阿部健一編著、『生物多様性 子どもたちにどう伝えるか』、昭和堂、2012年。
- 3 須田研司監修、『昆虫たちのやばい生き方図鑑』、日本文芸社、2019年。
- 4 永幡嘉之著、『くらべてわかる昆虫』、山と溪谷社、2017年。
- 5 イデイス・コップス著（黒坂・滝川訳）、『イマジネーションの生態学～子ども時代における自然との詩的共感』、思泉社、1986年。
- 6 長瀬嘉之、『くらべて分かる昆虫』、山と溪谷社、2017年。

追記資料

本科目に続き、3年後期「保育内容の教材研究と開発（環境）」は、演習2単位、3年生の後期科目で、

資料2 保育内容の教材研究と開発（環境） 授業日程（2021年度）

クラス 16名	1	オリエンテーション（シラバス・授業日程説明）	Teams 実施
	2	野外保育の理解①（自然遊びの意義と保育者）	絵本・図鑑活用
	3	野外保育の理解②（リスクマネジメント）	ICT 機器活用
	4	野外保育の下見と園児との交流	担当クラスの見学
	5	教材研究（フィールドビンゴカードの理解）	年齢別で作成
	6	教材研究（フィールドビンゴカードの作成とリハ）	野外模擬保育
	7	野外での保育実践	年齢別チーム保育
	8	保育ドキュメンテーションの理解	デジタル資料
	9	保育ドキュメンテーション作成①（ICT活用）	iPad 作成
	10	保育ドキュメンテーション作成②（ICT活用）	iPad 作成
	11	保育教材の開発（自然散策すごろくゲーム）	iPad 作成
	12	発表資料の作成（PPT）と発表原稿作成	情報機器活用
	13	発表1	同上
	14	発表2	同上
	15	全体振り返り（同上）	同上

15コマで、16名の1クラスで授業を運営している。21年度が初開講であった。履修者は、幼児教育コース生と児童教育コースの幼免履修者である。21年度の授業日程は資料2の通りである。この科目の振り返り（実践研究論文としてまとめること）は、2年分が終了する次年度に行う予定である。

表に示すように、本科目1年目（21年度）は、フィールドビンゴカード作成および野外保育の実践（2園で実施、学生を2グループに分ける、7人と9人）を、保育園の土曜日クラスの園児（約20名、3～

5歳の異年齢保育）と行った。実践後は、保育ドキュメンテーションを作成した。保育の現場におけるICT活用は保育界における今後の課題として挙げられる。その点で、保育者養成においても導入していく必要がある。保育ドキュメンテーションは、保育の流れをデジタルカメラなどの機材で切り取り、言葉をつけて、遊びの展開や深まりをICTを通して、子ども・保育者・保護者間で共有することに意義がある。この共有によって、教育課程への参画を三者が関わるカリキュラムマネジメントの重要な視点である。以上